

平林たい子『施療室にて』

—プロレタリア文学と産児制限との関わりを中心に

ミヒールセン エドウィン

1920年代に女性権利を代表する運動が登場すると同時に、女性のリプロダクティブ・ライツの闘争が始まった。その中で、最も活躍していたプロレタリア婦人運動家たちは、階級闘争を女性権利と結び付け、女性のリプロダクティブ・ライツを要求する無産者産児制限同盟（プロ BC）を結成した。本発表では、無産者産児制限の言説を踏まえながら、平林たい子の「施療室にて」を分析することで、産児制限とプロレタリア文学との相乗効果を検討する。

発表者の博士課程の論文では、プロ BC の新聞やビラを照らし合わせ、産児制限とプロレタリア文学における生殖と女性の階級的乃至ジェンダー的な連帯感の（不）可能性を研究した。特に無産者産児制限同盟の一会員であった松田解子が短編「乳を売る」で産児制限をどのようにして階級闘争の手段に用いたかについて解釈を提示した。家事（育児も含めて）と仕事の二重負担を抱えているプロレタリアの女性たちがどのように団結し、産児制限の戦略に対してどのような階級闘争を展開したかを解明した。

以上の先行研究に関連して、本発表では、1927年の『文芸戦線』の第9号に発表されたプロレタリア作家平林たい子の「施療室にて」が「良妻賢母」という理念に対して、どのように人間生殖の必要性を問い直したかを考察する。同時代評では、「太った肉体を持つてゐる、その身体で書いてゐる」と評価された「施療室にて」は、ブルジョア作家の作品が「きれいで、お上品で」ある書き方に対して、「汚い、よごれ濁った、醜悪な方面」の描写によって、女性の固定されたジェンダーの主体性を問題にする作品である。平林の創作活動を踏まえながら、「施療室にて」における「身体執筆」を分析し、如何に主体性を問題にしたかを吟味する。ブルジョアの家族主義を否定し、身体そのものによって未知の主体性の可能性を探索する主人公「光代」が生殖の価値を再考し、生殖以外の女性の可能性を探求することが、当時どのような意味を持っていたかに焦点を当てる。

Hirabayashi Taiko's "At the Charity Ward": Proletarian Literature and Birth Control

Michielsen Edwin

In the 1920s, the struggle surrounding women's reproductive rights started in tandem with the appearance of women's rights movements. Among these movements, ardent proletarian women activists connected class struggle with women's rights and established the Proletarian Birth Control Movement (ProBC), which advocated for women's reproductive rights. In this presentation, I will examine Hirabayashi Taiko's "At the Charity Ward" against the historical backdrop of proletarian birth control politics, in order to elucidate the mutual relationship between birth control and proletarian literature.

In my doctoral research, I study the (im)possibility of a gendered class solidarity with respect to women's reproduction in proletarian literature, drawing on newspapers and leaflets published by ProBC. In particular, I analyze Matsuda Tokiko, who was a member of ProBC, and her short story "Selling Breasts," to demonstrate how birth control was utilized as a method of class struggle. I reveal how proletarian women, suffering from the double burden of unpaid housework (including child-rearing) and paid labor, came together in unity and sought to forward class struggle with regards to strategies of birth control.

Building upon this research, in this presentation I will consider how Hirabayashi Taiko's "At the Charity Ward," published in the ninth issue of *Literary Front* in 1927, challenges the necessity of human reproduction in light of the ideology of "Good Wives, Wise Mothers." Reviewed by literary critics at the time as a work "written with a body of ample flesh," "At the Charity Ward" problematized the fixed gender subjectivity of women through its depiction of "dirty, contaminated, and ugly aspects," which contrasted with the writing style found in works by bourgeois writers characterized as "beautiful and elegant" (Kuroshima Denji, 1928, 60). In discussing Hirabayashi's literary writings, I will analyze this "corporeal writing" in "At the Charity Ward" and illuminate how it questioned subjectivity. I will focus on how the protagonist Mitsuyo, who, in rejecting bourgeois familialism and exploring possibilities of unknown subjectivities through the body, reconsidered the value of reproduction and sought for a womanhood beyond reproduction.

平林たい子「施療室にて」
ープロレタリア文学と産児制限との関わりを中心にー

ミヒールセン エドウィン
トロント大学

はじめに

1919年に劇作家秋田雨雀は「多くの女性が子供を産んでいる。然し、日本の女性から、出産に関する記録を一度も聞いたことがない」と述べた。十年後評論家蔵原惟人はプロレタリア文学の多様化を提案し、作家に「産児制限小説」の創作を促した。1920年代にプロレタリア文学が産児制限の題材を導入する背景は、女性の生殖器官や産児調節の科学研究が進んでいることと重なり、プロレタリア作家らが生殖へ目を向け始めた時代であった。それまで、日本の政府は生命と生殖の衛生、墮胎の犯罪化、生殖の制限の法律を次々制定した。しかも、女性の母性や生殖が重視される「良妻賢母」という新しい思想のもとに、出生率を上げる人口増加の政策によって国民国家と帝国の建設を強め、生命政治の制度を作り上げた。1920年代にこういった政策にたいして女性権利を代表する運動が登場すると同時に、女性のリプロダクティブ・ライツの闘争が始まった。その中で、最も活躍していたプロレタリア婦人運動家たちは、階級闘争を女性権利と結び付け、女性のリプロダクティブ・ライツを要求する無産者産児制限同盟(プロ BC)を結成した。

平林たい子の「施療室にて」における生殖批判

産児制限の活動が高まる背景に、平林たい子が登場し、出産に苦しんでいる女性の物語を次々に発表した。1927年の『文芸戦線』の第9号に発表された平林たい子の「施療室にて」は一人称で語る社会主義者の光代と彼女の難産の物語である。東京の監獄から釈放後、光代は夫と日本本土から満州国に移住した。そこで光代と夫は三人の苦力とテロ攻撃を企んだが、失敗して警察に逮捕された。すでに妊娠している光代は妊娠脚気に罹ったため、刑務所から施療室に移動された。施療室にいる間、光代は夫との関係を反省し、夫の女性観を批判しながら、「良妻賢母」の家族主義という概念を疑問に思う

ようになった。光代は一人で産んだ子供に人工栄養のお金がないため、余儀なく脚気に濁った母乳を飲ませた後、子供を亡くしてしまう。家父長制と資本主義の支配下に生殖が無益だという結論に至る光代は生殖以外の女性の可能性を探求していく。光代にとってその可能性は多元的でもあり、未知のものでもあると自覚したところで物語の幕が下りる。

結言

平林たい子のようなプロレタリア作家らは、時勢に応じて生殖に対する考えの変化を物語にも導入した創作を始めた。だが、プロレタリア文学は産児制限の成功を語る内容ではなく、むしろ出産や育児に苦しんでいるプロレタリア婦人の経験そのものに注目した。したがって、プロレタリア作家は避妊具の使用などをほとんど語らなかったものの、プロレタリア婦人の苦しみを語ることで、産児制限の必要性を訴えたのである。平林たい子の「施療室にて」が指摘するように、資本主義とその固定した女性の生殖役割が継続する限り、生殖が無益になり、生命政治の制度によって、下層階級の搾取が続くのである。